

# 小説 波乱万丈

三屋眞一

平成二十年に八十三歳で亡くなった松下栄の人生は、いずれ時期が訪れたら誰かに小説にしてもらいたい、と思うほどの波乱万丈の人生であった。

今回はその半生を紹介する。

## チューリップの咲く公園

昭和三十五年春のことである。九頭竜川のほとりにある公園の一角に、色とりどりのチューリップが咲いていて、公園を訪れる人の目を楽しませていた。三十五歳の誕生日を迎えたばかりの松下栄は、その可憐なチューリップを見ようと、一つ年下の妻と子供たちを連れて公園に来ていた。

栄には母親が二人いる。一人は生みの親のアユで、もう一人は育ての親のナツだ。アユは栄が三歳のときに離縁されたが、その後再婚して、ここから一時間ほど離れた町で幸せに暮らしているという。が、はっきりしたことは、この時点ではまだ分かっていなかった。

父親の光は、栄が十二歳のときに支那事変で亡くなっている。

その日は天気の良い日曜日で、他にも何組もの家族連れが訪れていた。

「ねえお兄ちゃん、ここに座って、チューリップの歌を歌おうよ」

今年八歳になったばかりのサチが、二つ年上の兄に、愛くるしい瞳を輝かせて言った。

「うん——」

兄の誠は、妹の手を握って大きく前後に揺さぶりながら、チューリップの歌を歌い出した。

咲いた 咲いた チューリップの花が ♪

ならんだ ならんだ 赤 白 黄色 ♪

どの花みても　きれいだな　♪

妻の日名子も子供たちと一緒にになって、楽しそうに歌っている。これまでに何度も命拾いを経験した栄は、そんな家族の姿を眺めて、今生かされていることの幸せを味わっていた。

### 最初の命拾い

ミッドウェー海戦で日本が敗北を喫してから、日本の戦況は次第に悪化の一途を辿り、翌昭和十八年には学徒出陣が始まった。だがこのとき、日本国民はまだそれほどほどの危機感を感じてはいなかった。このような情勢の中、栄は陸軍兵士としての道を歩むことになり、昭和十九年夏、中国戦線へと出征して行った。

栄たちの部隊は桂林に駐屯して補給任務に当たる事になった。だが兵器、燃料、弾薬、食料などの物資が不足し、満足に補給出来る状態ではなかった。さらに鉄道沿線を占領していたものの、その両脇は敵に囲まれているという状況であった。栄たちはそんな厳しい中へ送り込まれたのであった。

鯉よりも大きな川魚や背丈ほどもある蕨を食したり、相手からの銃撃をかわすために泥沼に身を隠したりして、一日一日を必死で生き抜いた。だが栄は、とうとう右足に銃弾を受け、負傷してしまった。軍医から「足を切断することになるかも知れない」と言われた栄は、何て不運なんだと思いつながら日本に戻ったが、実際はとても幸運なことであった。というのは、栄が日本に戻った直後、所属していた部隊が総攻撃を受け、多くの戦友が命を落としてしまったのである。もし負傷していなかったら、恐らく栄も命を落としていたことだろう。

### 二度目の命拾い

だんだんと戦況が悪化して行く中、何とか歩けるようになった栄は、再び中国戦線に赴くことになった。

昭和二十年八月、栄の新たな所属部隊は六日の出発に備えて、四日から広島で待機していると、五日の夕方に急遽倉敷へ移動させられてしまった。ある女性と五日の晩に会う約束をしていた栄はとても悔しかったが、実は、この突然の移動が二度目の命拾いになったのである。

投下した。いきなりピカッ！と鋭い閃光が走ったかと思ったら、やや間をおいて、ドカン！と地を震わすような音がし、同時に爆風が来て窓ガラスが粉々になり、障子や襖が倒れ、固いドアまでもがねじ切れてしまったのである。人類史上初の核兵器による惨禍であった。もしそのまま広島にいたなら、恐らく栄たちは一卷の終わりであったことだろう。どのような事情があったか分からないが、急遽倉敷に移動になったことで奇跡的に助かったのがあった。

「だから今、本来なら無いはずの命が有り、本来ならいないはずの誠やサチが存在しているのだ――」

そう思う栄は、事あるごとにその体験を思い出し、機会あるごとに子供たちに言い聞かせてきた。

「そろそろお昼にしましょう」

「わーい、やったー！」

この公園に来るときはいつも、日名子はお握りとともに玉子焼きを作って持ってくる。日名子を作る玉子焼きは格別に美味しいので、サチも誠も、日名子が風呂敷を広げると大喜びするのであった。

サチが一口サイズに切ってある玉子焼きを手でつまんで、小さな口を大きく開けて放り込み、

「とっってもとっっても美味しい！」と言いながら日名子のほうに笑顔を向けると、

「やっぱりお母さんの玉子焼きは最高や！」と、誠もサチと同じような仕草をして笑顔を弾かせた。そんな微笑ましい子供たちの顔を眺めながら、日名子は海苔を巻いたお握りを栄に手渡した。お握りを受け取った栄は、それこそ大きな口を開けてがぶりと噛み付いた。硬めに握ってあるので、お握り二つで茶碗三杯分はあるが、栄はそれを三つも平らげってしまった。外で食べるお握りは特別美味しいのだ。

「あー美味かった。ご馳走様でした！」

家にいる時のように合掌して食後の挨拶をすませると、栄の頭の中に、広島での奇跡の体験が浮かんできた。

「父ちゃんはなあ、昭和二十年八月五日に広島にいたんや」

「ふうん」

「翌日の八月六日って、何の日か知ってるやろ？」

「うん、広島に原爆が落ちた日やろ？」

誠は今までに何度も同じ話を聞かされてきたので、八月六日がどんな日なのか、しっかりと覚えていた。

「そうや、父ちゃんの部隊は、原爆が落ちる前の日の夜、急に倉敷へ移動することになったんや」

「そんで助かったんやろう？」

「そうや」

「そんで僕が生まれたんやろう？」

「そうや、あのまま父ちゃんが広島にいたら、お前はここにいないんや」

その時サチが、可愛い目を父の方に向け、「わたしは？」と訊く。

「もちろんお前もあんちゃんと一緒にや。父ちゃんが生きていたから、お前も今、ここに  
いるんやぞ」

「ふうん」

そのとき、日名子が誰かと話しているのが目に入った。よく見ると、分家のあんさん夫婦であった。分家とは、行き来が途絶えてかれこれ六年になる。

「あんさん、お久しぶりです」

「おお、栄か。身体のほうはもう大丈夫か？」

「はい、もうすっかり良くなりました」

「あの時は悪いことをしたのう」

「いえ、もうええんです」

栄はサチが生まれると直ぐに病に倒れ、長い闘病生活を送ったので、お金に困った栄が分家に借金を申し入れたことがある。そのときは分家もいろいろあったらしく、貸してもらえなかったのであった。

「子供たちも、元気そうやのう」

「はい、お蔭さんで……」

久しぶりに話をしたら、今までのわだかまりがすうっと消え、代わりに日名子との結婚式のことを思い浮かんだ。

## 結婚

二度の命拾いを経験して実家に戻った栄が玄関の雪を取り除いていると、

「明けましておめでとうございます」と、分家のあんさん夫婦が新年の挨拶にみえた。座敷に上がってもらい、お神酒でもてなすと、

「どうや栄、そろそろ嫁をもらわんか。隣の小泉村に綺麗な子がおってなあ、お前にぴったりやと思うんや」と、四月に二十一歳の誕生日を迎える栄に縁談を持ち掛けてきた。急だったので、栄はどう返事してよいか分からず、

「ほうやのう、考えとくわ」と、言葉を濁した。

「そんなこと言うてると、他所へ嫁に行ってしまうぞ！」

そんなに綺麗な子なのか、と思ったが、恥ずかしさもあって素直になれない。

「そうかなあ……」

そこへ継母のナツが口を挟む。

「栄、あんさんに任せたら？」

「そうやなあ……」

煮え切らない返事であったが顔はにやけていたので、脈があると感じた分家のあんさんは、強引に話を進めようとした。

「ワシに任せておけ、ええな？」

見つめられた栄は、本心は嬉しいのだが、しぶしぶという振りをして頷いた。

この後栄は、どんな娘だろうと思い、友人を連れて小泉村まで見に行った。そして、杉山家の玄関先にいた背の高い綺麗な娘を見て、あの娘なら申し分ない、と思った。

村に戻った栄は、その足で分家に向かい、自分が見て来た娘の姿形を報告して、自分の相手であるかどうかの確認をとった。すると分家のあんさんは、

「間違いない、その子や！」と断言した。杉山家には娘が三人いたし、隣の家にも日名子と同年の娘がいたので、栄の見た娘が本当に日名子であったかどうか確信はなかったが、違いかも知れないと言うと話が進まないなので、敢えてそうだと断言したのであった。別に騙すつもりはないが、もし違っていたとしても、申し訳ないという気持ちは全くなかった。何故なら、この時代のこの村では結婚相手は全て親任せで、当人同士はお互いどんな顔をしているのか知らないまま結婚する、というのが一般的であった。だからむしろ、前もって相手を見に行った栄の行為のほうが、あんさんに対して失礼だったのだ。

「ほんなら話を進めるぞ。ええな！」

「うん、頼みます——」

こうして縁談が進められることになった。

日名子は大正十五年九月十八日、小泉村の杉山家の長女として生まれた。尋常小学校を卒業すると直ぐに福井の繊維会社に就職し、そこで六年余り働いていたが、昭和二十年七月に空襲に見舞われたため、実家に戻っていた。そんな矢先、栄との縁談が持ち上がったのであった。

三月に入ってから好天が続いたので、三月十三日の結婚式当日は、田んぼにはまだ雪が残っていたが、道には全くなかった。青空の下、日名子たち親族が行列を組んで、小泉村から丸山村へとやってきた。通りには、花嫁を一目見ようと、多くの見物人が列を成していたが、そこに栄の姿はなかった。歓迎の祝宴が終了するまで新郎は奥に隠れていなければならぬ、というのがこの土地のしきたりであったからだ。だが栄は、皆に見付からないようにと、白無垢の新婦がそろりそろりと歩く姿を、小屋の陰からそっと眺めていた。綿帽子を被っているので顔はよく見えなかったが、間違いなくあの子だ！ と思い、胸が高鳴った。

一通りの儀式が終了し、いよいよ二人の対面のときがやってきた。

日名子が両手をつけて頭を下げている奥座敷に、分家のあんさんに連れられて、栄が入ってきた。分家のあんさんが挨拶をする。

「日名子さん、これが栄です。よろしゅうお頼み申します」

「日名子です。どうぞ末永くお頼み申します」

日名子はそう言うと、ゆっくりと顔を上げた。その顔を見て栄は驚いた。

〈違う！ あの娘ではない！〉

何と、目の前の花嫁は、小泉村で見た娘ではなかったのである。だが良く見ると、可愛い感じのする娘であった。

栄は驚きの表情を笑顔に作り変えて言った。

「こちらこそ、どうか末永くお頼み申します」

こうして、大変なハプニングであったが、何とか無事に結婚式が終了した。

日名子の背は高からず低からずであった。小屋の陰から見たとき背が高く感じたのは、綿帽子を被っていたからだろう。性格のほうは以外にさばさばしていて、とても明るい女であった。普段は上品にしているが、一旦笑い出すと表まで聞こえるほどの声を上げて笑うので、少々恥ずかしいと思うこともあったが、栄はそんな日名子が気に入り、これで良かった、と心から思えたのであった。

「日名子のお陰で、俺は今日まで何とかやって来れました。あんさんに日名子を紹介してもらって、本当に良かったと思うとります」

そうお礼を言うと、栄はあんさん夫婦に笑顔を送った。そんな幸せそうな栄の顔を見て、あんさん夫婦は嬉し涙を浮かべた。それからしばらく三人で立ち話をし、あんさん夫婦が立ち去ると、栄は再び元のベンチに腰を下ろした。そして、子供たちと遊ぶ日名子の姿を眺めて、日名子には随分と苦勞をかけたなあと思ひ、心の中で手を合わせながら、日名子との結婚生活を振り返った。

### 製麺工場

結婚してから三年ほどは、日名子のために必至になって農業に従事した。が、米作りだけではいくら頑張っても楽にならない。そこで栄は、米作りの傍ら、何か儲かる商売を始めようと考えたが、なかなか良い案が浮かばず、ただ時間が過ぎて行くばかりであった。また松下家では、栄の祖父の時代から毎年、浄土真宗のお坊さんを招いて講を開いていたが、父親の光が亡くなってからしばらく途絶えていたので、二度の命拾いを経験した栄が、命拾いしたのは阿弥陀さまのお陰さまだとして、戦争から戻った年の秋から講を開いていた。

講の講師は、石川県の七尾に住まいのある長田誠開というお坊さんで、父の代からお世話になっているお方であった。

昭和二十四年秋、一年ぶりに長田先生が松下家を訪れた。栄が講を開くのは今回で五回目である。先生のお話は午前十時からと午後二時からの二回行われ、それが終了すると系列のお寺へ行くことになっていた。そのお寺で一泊した後、町で時計屋を営んでいる牧野さんという家に行くことになっている。だが、栄との話が盛り上がり、長田先生は急遽松下家で宿泊することになった。

長田先生と栄が座敷で話をしていると、台所のほうから急に大きな笑い声が聞こえてきた。

「あははははは……」

日名子の笑い声だ。日名子は、どんな立派な方がおられてもお構いなしに、声高々に笑う。

「すみません。いつもあんな調子で笑うので……」

「笑う門には福来るといふから、良いではないか——」

「はあ……」

日名子の笑い声が嫌いではないが、というよりむしろ好きであるが、やはり立派な人の前では恥ずかしい。

夕食の用意が整い、先生と酒を酌み交わしながら、栄は日ごろ考えている商売のことを口にした。

「何か、農業しながら出来る商売はないものでしょうか？」

すると先生は、

「うどん作りはどうや、それなら農業しながらでも出来るし、うどんの原料の小麦を自分の田んぼで作れば、原価も下げられる」

「それはいいかも知れませんね」

「それと、黄な粉も作ったらええ」

「黄な粉？」

「そうや、黄な粉にする大豆も田んぼの畔で作れるし、これならむしろ農業をやりながらのほうが好都合というものや。商売は初めてでも、真面目にやれば失敗はせんやろう」

栄にとって、先生の話は目からウロコであった。

「ぜひやってみたいと思います」

栄は目を輝かせて言った。長田先生はうんうんと頷くと、さらに続けて、

「どうや栄、日名子をワシに預けんか？」

「えっ？」

栄には、先生のおっしゃる意味がよく分からない。ポカンとしていると、

「日名子をワシに預けてくれれば、うちの工場でうどんの作り方を教えてやろう」

「えっ？ 先生もうどんを作っておられるんですか？」

「ワシが作っているわけではないが、ワシの家は製麺工場で、女房と息子夫婦が作っているのや」

「そうなんですか——」

長田先生のお宅はつきりお寺だと思いついたので、栄は目を白黒させて驚いたが、栄にとっては願ってもないことであった。

「そんなら、直ぐにでもお願いします！」と、栄は深々と頭を下げた。あまりにも決断が早いので、長田先生は少し驚いた顔をしたが、

「ワシは構わんが、肝心の日名子やナツさんとよく相談してから決めたほうが良いぞ」



と、焦る栄をたしなめた。すると栄は、直ぐにナツと日名子呼び寄せた。

普段から栄は、何か商売をしてみたい、と口癖のように言っていたし、長田先生のおつしやることでもあるので、二人とも特に反対はしなかった。

「ほんなら、直ぐにでも長田先生の所にお世話になろう」

「えっ？ 直ぐに？」

栄のせっかちさに、ナツも日名子も呆気にとられた。

「こんな身体で、七尾に行けるやろか」と、お腹をさすりながら日名子が言った。まだお腹は大きくなかったが、妊娠していたのだ。

「日名子のお腹には、子が宿っておるのか？」

知らなかったという顔をして尋ねる先生に日名子は、

「はい、三ヶ月ちよつとです」と応えてから、

「今直ぐでなくてもいいんじゃないの？」と、栄の方を見て言った

「そうや、今はちよつと無理やろう——」

ナツも、もっと先で良いではないかという口ぶりだ。しかし栄は、

「子供が生まれたら、日名子は子育てにかかりつきりになってしまう。そうなると余計難しくなってしまうやろう。お腹の中にいるほうが、手がかからんで良いのと違うんか」と、長田先生のところでお世話になるのは今しかないということ告げた。あまりにも急なことなので、日名子もナツも動揺を隠せなかったが、よく考えてみれば、栄の言い分はもっともであった。結局栄の考えを受け入れることになり、三日後、日名子は栄に連れられ、長田先生とともに七尾へ旅立った。

日名子を預けて七尾から戻った栄は、来年のうどん作りのために、既に稲刈りの終わった田んぼに小麦の種をまいた。二毛作をしようというのだ。

翌年の雪が溶け出した頃、どうなっているかと思つて田んぼへ行くと、期待通りに小麦が顔を出していた。

四月に入ると、日名子が、まるでスイカでも抱えているかのようなお腹を抱えて戻ってきた。そのお腹を見てナツが、

「お帰り、ご苦労さんやったなあ」と、日名子を労った。

「いえ、先生の奥さんや息子さんたちがとても良い人だったので、何の苦労もなかったわ」

「そうか、それは良かった」

赤ちゃんも小麦も順調に育ち、昭和二十五年五月二十六日、日名子は元気な男の子を出産した。喜んだ栄はすぐさま役場に飛んで行き、出生届に『松下誠』と書いて出した。長田誠開先生の一字を貰ったのだ。

その直後の五月末、今度は小麦を収穫した。そして、すぐさま田んぼに米の苗を植え付けた。

梅雨に入るとうっとうしい日が続いたが、栄の気持ちは晴々としていた。長男が授かったということもあるが、本当のところは、商売の準備が着々と進んでいたからだ。家に隣接する納屋の中のを全部放り出し、そこへうどんを作る機械や小麦を粉にする機械などを設置し、もう少しで動かせるまでになっていた。

そして、いよいよ据え付けた機械の試し運転のときが訪れた。

「おー！」

真っ白なうどんが出てくると、自然に感動の聲が上がった。早速家族で試食してみる。

「美味しいわ」

「うん、ほんとにうまい」

手打ちうどんに比べると、食感はやや柔らかかったが、まずまずといったところだ。

「これなら絶対に成功する！」と、栄は確信した。

珍しいということもあって、多くの村人が工場見学に訪れた。その人たちに栄は、茹で上がった直ぐのうどんに黄な粉をかけてご馳走した。それが評判となって商売は大当たりし、栄は充実した忙しい毎日を送ることとなった。

一方日名子は、商売の手伝いと田んぼの手伝いのほかに子育てもあったので、毎日毎日がフラフラであった。特に稲刈りのときは、誠をいずめに入れてあぜ道に置き、泣き出すとおしめを換えたりお乳を飲ませたりして、それはそれは大変であった。

そんな日名子の苦労を見て何とかかしたいと思った栄は、ナツの反対を説き伏せ、家も田んぼも畑も全部売っぱらって、町へ出たのであった。

## 大病

知人に二軒続きの長屋を紹介され、栄はそこを製麺工場にした。下に台所と六畳の部屋が一つあり、二階にも六畳の部屋が一つあったので、そこで生活も出来るのだが、仕事場と生活の場は離れていたほうが良かろうと、製麺工場から五十メートルほど離れたところの長屋も借りた。

栄は、まだ皆が寝ている頃に製麺工場に出かけ、うどんと黄な粉を作った。だが、客足はさっぱりであった。

〈何とかせんとあかんなあ〉

なかなかお客が来てくれないので、待っているだけでは駄目だと思った栄は、オートバイに黄な粉やうどんを積み、訪問販売をするという方法をとった。さらに、一軒一軒訪ねて歩くのは苦手だったので、拡声器を使ってお客を呼び寄せた。そしてさらに、全部売れきれぬまでは帰らなかった。

日名子は、栄がいつ帰ってくるのか予想がつかないので、遅くなると、事故でもあったのではないかと心配させられたが、反面、一日の売り上げがいくらなのか、朝の時点で見当がついたので、金銭面のやりくりは楽であった。

年が明けて二月に入ると、日名子が女の子を出産した。喜んだ栄はその子をサチと名付けた。だがその喜びも束の間、栄は高熱を出して寝込んでしまった。最初は風邪だとばかり思っていたが、風邪薬を飲んでも一向に咳が止まらないので、ひよっとすると肺結核ではなかるうかと思ひ、隣の総合病院に入院した。診断の結果は、やはり肺結核であった。結核は死の病と言われていたので、幼子を二人抱えた日名子は、目の前が真っ暗になってしまった。

一方、栄は自分の命より、商売のほうに気がなっていた。

「日名子、誰か従業員を雇って、何とか商売を続けてくれ。頼む！」

「はい——」

気丈にも、日名子は栄の言うとおりに従業員を雇って、そして二人の子供を保育所に預けて何とか製麺工場を切り盛りした。サチは生まれて間がないので、保育所に預けるのは気が引けたが、製麺工場をやっていくには、それも止むを得なかったのである。

日名子の頑張りもあって、商売のほうはなんとか続けることは出来たが、栄の症状のほうはだんだんと悪化するばかりであった。やがて結核菌が脳に入り、脳膜炎を引き起こしてしまった。担当の医師が、病室にいた日名子を廊下に呼び出し、小さな声で告げた。

「もう長くはないでしょう。今のうちに、会いたいと思う人に合わせてあげなさい」

「……………」

助からないかも知れないと思ってはいたが、面と向かって言われると、さすがに言葉が出てこない日名子であった。仕方なく、日名子は親戚や知人に連絡を取った。危篤との連絡を受けた大阪のウメお婆さんと東京のフミお婆さんは、喪服の用意までしてやってきた。

「もう、あかんのか？」

「そうみたいです……」

だが、栄の生命力は医者の子想を裏切り、一向に医者言う最後の日がやって来ないまま時間が過ぎて行った。一週間が経った頃、

「何かあったら、直ぐに電報頂戴ね」という言葉を残して、ウメおばさんとフミおばさんは、それぞれの家に戻って行った。

それからさらに一週間ほど経つと、今度は回復の兆しが見えるようになった。意識までしつかりしてきた。そして、ビックリするようなことを言うのであった。

「廊下で、もうあかんで、医者が言うてたやろう？」

「えっ！」

日名子は驚いた。確かに医者はそう言ったが、小さな低い声で、それも囁くように言ったので、病室の中にいる栄に聞こえる筈がない。日名子には、栄が神がかっているように思えた。

医者は病室を訪れる度に、信じられない、と言いながら、何度も首を傾げた。

「凄い生命力です。普通の人とは違います。この分だと、間もなく退院できるかも知れません」

そう言って医者は日名子を喜ばせてくれたが、この後は一進一退を繰り返し、四月になっても退院できるところまでには至らなかった。長引く闘病生活に対応するため、日名子は栄に相談して、病気が治ったら返してもらうことを条件に、工場を貸すことにした。家賃収入しか入らなくなるので経済的に苦しくなるが、経営に頭を使う必要がなくなり、気分的に楽に看病できるからであった。

栄の症状は一進一退を繰り返しながら、あつという間に一年の歳月が流れた。ストレプトマイシンという高価な薬を使うので、蓄えも徐々に底をつき始めていた。

「神様、どうか主人の病気を治してください！」

日名子は神社に足を運び、必至になってお百度を踏んだ。すると不思議にも、徐々に回復の兆しを見せ始めたのである。これにはさすがの医者も首を傾げ、

「何て生命力の強い人なんでしょう」と、驚くばかりであった。

栄も日名子も、いよいよ退院できる、と喜んだが、何故か一向に退院の許しが出ない。

「脳膜炎ならとくに死んでるはずや——俺の病気は本当に脳膜炎やるか？」

自分の病気を疑った栄は、密かに病院を抜け出し、金沢の大きな病院で診察を受けるこ

とにした。だが結果は、やはり結核性脳膜炎であった。それで仕方なく元の病院に戻った。暑い夏も過ぎ、病室の窓から対になった赤とんぼを眺めていると、ふっと長田先生の顔が浮かんだ。町に出てきてからは狭くて講が開けなかつたので、病気になるまでは、長田先生のお説教は牧野さんの所へ聞きに行っていたが、病気になるからは、それすらも出来ないでいた。

〈長田先生に会いたいなあ……〉

ある日栄は、牧野さんのところで長田先生の講が開かれると聞くや、そつと病院を抜け出して会いに行った。

「先生——」

「おお、栄か。風の噂でもうあかんと聞いたが……」

「はい、一度はあの世に行つたんですが、何とか戻つて来れました……」

「そうかそうか、それは良かった——」

うつすらと涙を浮かべている長田先生の顔を見て、栄の目にも涙が溢れてきた。

「栄、南無阿弥陀仏は称えておろうな」

「はい、いつもいつもお称えしております」

「そうかそうか……で、どんな気持ちで称えておるのかのう」

「どんな気持ち？」

「そうや、念仏というものは、ただ口から南無阿弥陀仏という言葉が発するだけではあかんのや」

「………」

「心から信じて、阿弥陀さまの国に生まれたいと願つて、南無阿弥陀仏をお称えするところが大事なのや」

「心から信じて、阿弥陀さまの国に生まれたいと願つて、南無阿弥陀仏をお称えする……」

「そうや、その気持ちで念仏すれば、死後必ず極楽浄土に往生できるが、そうでなければ地獄に落ちて苦しむことになる。栄、間におうて良かったのう」

栄はこれまで、南無阿弥陀仏をお称えしてはいたが、それは口先だけの念仏だったので、先生はそれを見抜いて、念仏の心構えを教えてくれたのだ。また、間に合つて良かった、と言われた意味は、生きている間に念仏の心構えを聞くことが出来て良かった、ということであった。直ぐにそれを理解した栄は、

「はい、あのまま死んでいたら、地獄に落ちるところでした」と、目に涙を溜めて言った

「お前を地獄に落とすたくないご先祖が、可哀そうだと思って引き戻してくれたんや。ご先祖様によくお礼を言うことやなあ——」

「はい、分かりました！」

栄は長田先生によくお礼を言うと、その足で丸山村にあるお墓へ行き、松下家のご先祖に心から感謝を捧げた。

病院に戻った栄は、長田先生のお言葉を思い起こし、心から南無阿弥陀をお称えし続けた。するとその晩、栄の夢の中に、支那事変で亡くなった父親が軍服姿で現われた。

「栄、長田先生のお話を忘れるなよ。南無阿弥陀仏という六字の名号には不思議な力が宿されている。だから、心から信じて、阿弥陀さまの国に生まれたいと願い、南無阿弥陀仏をお称えするがよい。そうすれば、生きながらにして極楽浄土往生が定まる。極楽浄土往生が定まれば、八百万の神々がお前を守ってくれるので、お前の病気もきつと治るだろう」

父はそう言うと、にっこり微笑みながら天上へと消えていった。不思議にも、この日之境に栄の身体の調子が徐々に良くなり、お正月には外泊が許されるまでに回復したのである。

しかし、お金のほうはどうに底をついてしまっていて、生活するのにも事欠いた日名子は、結構な額の治療代を滞納していた。それを知った栄は、まだ完治していなかったがそのまま退院することにし、工場を返してもらってまた商売を始めたのである。だが、以前のような訪問販売は出来ないのです、生活はギリギリであった。

そんなある日のこと、ナツが思いがけないことを口にする。

「前から思ってたんやけど、治が嫁さんもろたら、一緒に住もうと思うんや——」

治というのは栄の父とナツの間に生まれた子で、二年前の春に中学を卒業し、ウメおばさんを頼って大阪へ行き、和菓子店で働いていた。

「そうやなあ、その方が俺に気兼ねせんでもええやろうけど、大阪は遠いぞ」

「こっちに帰って来るらしいんや」

「いつ？」

「遅くても、今年中には帰れるっていう手紙が来たんや」

「そんな早よ帰ってくるんか。働くところあるやろかなあ？」

「南野さんここで働かせてもらおうと思っっているんや」

ナツの知人の南野さんは、絹織物の会社を経営していた。

「ふーん、そこまで決まってるんなら、そうしたらええわ」

「悪いなあ」

「何も悪いことなんかない。いずれはそうなる運命やったんや」

それから二カ月後、ナツは長屋を出て行った。家族が減ってしまったし、生活も苦しかったので、栄は少しでも経費を節約しようと、住まいにしていた長屋を返して製麺工場に引っ越した。

商売のほうは順調とまではいかなかったが、それなりにお客さんも来てくれたので、何とか食べていくことはできた。が、病院の治療代はまだ払えないままであった。支払いが滞ったままで通院するのは気が引けた栄は、分家に借金を申し入れたが、それも適わなかった。そんなとき、日名子の実家の親が、可愛い娘のためだとして三万円を用立ててくれた。それで漸く病院の治療代を払うことが出来たのであった。

## 火事

病氣も完治し、事業のほうも軌道に乗り出した昭和三十年秋のこと。

「おーい、火事やー、火事やぞー」

製麺工場の入り口の戸をドンドンと叩いて、誰かが叫び声を上げている。居間に寝ていた妻の日名子がそれに気付いて、隣で寝息を立てている夫の身体を揺さぶった。

「あんた、大変や！ 火事火事って、外がえらい騒がしいわー」

日名子の甲高い叫び声で漸く目を覚ました栄は、寝巻きのまま外へ出て驚いた。何と、隣接する木造二階建ての織物工場の屋根から、火がぼうぼうと燃え上がっているではないか。製麺工場も木造建築だったので、栄は焦った。

「うわあ、こりゃあかん。早よ逃げんと焼け死んでしまうー」

急いで引き返した栄は、慌てて二階に駆け上がり、布団からはみ出すようにして寝ている従業員の勝を叩き起すと、すぐさま階段を駆け下り、まだ目覚めない五歳になる長男の誠を抱きかかえ、日名子には三歳のサチを抱いて逃げるように告げて外に飛び出した。外に出ると、既に火の粉が舞っていた。消防隊員も駆けつけていたが、まだ放水するまでには至っていない。栄は妻と子供二人を稲刈りの終えた田んぼにおいて、

「ここでじっとしてろ」と言い残し、慌てる素振りでも戻って行った。

「あんた、気を付けねんや！」

「分ってる、心配すんな！」

近所の住民が続々と集まってきたが、手伝うものはおらず、殆どが野次馬であった。

「うわー、すげー」

織物工場の火が、まるで大蛇の舌のようにベロベロと栄の工場に襲いかかり、今にも飲み込んでしまいそうな勢いであった。従業員の勝は、二階にある自分の荷物を運び出すのに精一杯の様子だ。

〈今のうちに、大事なもののだけでも何とかせんと——〉

栄は頭から水を被り、製麺工場の居間に戻って、先ず手提げ金庫と仏壇の中の阿弥陀さまの像と位牌を手にした。その時、得体の知れない音が栄の耳を突いた。

「バチバチ！」

〈こりゃあかん！〉

そう思ったとき、

「何を運び出したらええんや」と、近所に住んでいる友人のやっさんが後ろから訊いて来た。栄の頭の中に子供たちの眠たそうな顔が浮かんだので、

「おう、ありがとう。ほんなら布団を頼む」と、子供たちの寝不足を心配して言った。

「分った！」

やっさんは、敷きっぱなしになっている布団を折りたたみ、二人分を重ねて一度に持ち上げた。嵩が大きいので、横になって首を傾げなければ前が見えない状態だ。

荷物を抱えたまま大急ぎで外に出ると、ホースを抱えた消防隊員が放水を始めていた。

あわてて見上げると、放水先は織物工場の屋根だったので、とっさに「良かった」という言葉が口をついて出た。製粉工場の二階にはうどんが干してあるので、もし放水先が製粉工場だったら、それが台無しになってしまうからだ。

火の勢いは衰える様子を見せない。織物工場と栄の工場は二間ほどしか離れていないので、直ぐにも燃え移ってしまいかねない状態であった。舞い上がった火の粉が、製粉工場の屋根に降りかかる。栄は合掌して念仏を称え始めた。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

すると不思議にも、急に雨が降り出した。

「こりゃあかん、布団がびしょぬれになってしまう」

やっさんは、両手いっぱい抱え込んだ布団を、急いで田んぼの中に建っている小屋に



運んだ。栄は手提げ金庫と阿弥陀さまの像とご先祖の位牌を、二人の子供の手を引いて田んぼに突っ立っている日名子に渡すと、

「子供をつれて、小屋の中に入ってる！」と言い残し、再び工場のほうへと走った。そして工場の入り口付近で二階を見上げていると、あんなに勢いよく燃え上がっていた炎がだんだんと萎縮し、やがて消えてしまった。それを見届けた栄は、安心して気が緩み、その場でへたり込んでしまった。

「良かった、助かったあ——」

雨の中でずぶ濡れになりながらも、栄はほっと一息つき、胸を撫で下ろした。炎に勢いがあると、延焼を防ぐために、本来なら栄の工場の二階部分にも放水するのだが、消防隊員の何人かは栄の工場がどうなっているのか良く知っていたので、ぎりぎりまで放水を控えていた。もし放水していたなら、建物は火災から免れたとしても、二階に干してあった麺類や、その真下の倉庫の材料や、水がかかると壊れてしまうかも知れない機械類が使用物にならなくなっていたことだろう。結果論であるが、消防隊員が放水を控えてくれたことによつて、栄の工場は何の被害も受けずに済んだのであった。

三日程たってから、栄はやっさんや顔見知りの消防隊員を集め、お世話になったことに感謝の意を込めて、家で焼きなべを囲んだ。

「ちよつと間違うてたら、今頃首をくくっていたかも知れん。皆のお陰で助かった。皆は命の恩人や、本当に有難う——」

栄が心からお礼を言うと、やっさんはなべの中の肉を卵の入った取り皿に入れ、興奮したような口調で応える。

「いやいや、栄ちゃんが強運やったんや。雨が降らんかったら、恐らく全焼やったやろう。本当に間一髪やった。今でも信じられんぐらいや」

消防隊員の秀やんも、興奮して言う。

「そうやなあ、ホースの水だけでは、あの火の勢いは止められんかったやろう。ほんとにあの雨はグッドタイミングや。筋書きを作っておいても、あんなに上手くはいかんやろう」

他の者も、奇跡のような体験を振り返って、そうやそうやと頷く。

「俺は、雨が降ったのはもちろんやけど、ホースの水を俺の工場にかけんかったっていうのが一番嬉しいんや。もしかけていたら、商品も材料も機械もめっちゃめっちゃになっ

「それは言える。秀やんがワシらに、ぎりぎりまで待つように指示したからや。指示がなかったら、雨が降る前にかけていた。それが普通やからなあ」

「そうや、普通なら水かけとる」

消防隊員たちが口々に応えると、感極まった栄の目から涙が零れた。

「もし全焼になっていたら、恐らく秀やんは、何で製粉工場に放水せんかったんやと責められ、何らかの責任を取らされたことやろう」

栄はそんなふうに思い、秀やんに頭を下げた。

「遠慮せんと、じゃんじゃん食べてくれ」

栄は生肉を大きな鍋にドンと放り込み、均等に熱が通るように広げた。

外にはまだ焦げ臭い空気が漂っていたが、焼け跡を見に来る野次馬が後を絶たない。中には、いい匂いがする、というような顔をして、ガラス窓からこちらを覗き込む者もいる。そんな野次馬たちのざわめきをよそに、栄は喜びに満ちた心で、友人たちを精一杯もてなした。

奥の茶の間では、日名子が子供たちに、黄な粉を振りかけたうどんをあてがっている。従業員の勝も一緒になって、黄な粉うどんを食べている。黄な粉うどんも今朝この工場で作ったもので、もしこの工場が焼けていたり、焼けていなかったとしても放水を浴びていたなら、作れなかったものだ。それを思うと、食べ慣れたうどんであるが、今日の日名子には特別美味しく感じられるのであった。

日名子は、黄な粉がたっぷりと付いたうどんを箸で短くし、サチの小さな口の中に入れた。

「美味しいでしょう？」

「うん——」

サチは口を三回ほどもぐもぐさせ、にっこり微笑んで頷いた。誠もまた、口の周りに付いた黄な粉をシャツの袖で拭きながら、美味しそうに食べている。そんな子供たちの姿を眺めながら、日名子は、今のこの幸せの瞬間をじっくりと味わっていた。

「結婚してからも、本当にいろいろあったなあ——」

ベンチに座って、しみじみと思い出に耽っていると、何処からともなく焼肉の匂いが漂ってきた。

栄の脳裏に、火事のときのすき焼きの場面が思い浮かんだ。

〈久しぶりに、すき焼きが食べたくなったなあ……〉

日名子には経済的にも精神的にも苦労を掛けてきたので『生活はなるべく質素に！』を松下家のモットーとし、財布も日名子に預けてきた。だからこれまで、ぜいたく品であるすき焼きは、大事な客をもてなすとき以外は食べることがなかったし、すき焼きという言葉すら、栄の口から言い出すことはなかったのである。しかし最近は景気も良いので、どうとう日名子に言えば食べさせてもらえらると思うのだが、自分の口からはなかなか言い出せなかった。そんなときサチがやってきて、

「お父さん、お肉の匂いがするね」と言ったので、これ幸いと思った栄は、

「おい、日名子——サチがすき焼き食べたいうて言うてるぞー！」と言おうと思っただが、周りにまだ人がたくさんいたので、とっさに口を噤んだ。それでしゃがんでから、「じゃあ、お母さんに、すき焼き食べたいうて言っといで」と、サチの顔を両手で挟んで言うと、サチは嬉しそうな顔をして頷き、一目散に日名子の傍へ走って行った。そして日名子の手を握り、

「お母さん、お父さんがすき焼き食べたいうて言ってるよ！」と言ったのである。

「アチャー！」

栄は思わず両手で顔を隠した。そして、自分が食べたいくせに人のせいにするところが自分そっくりなので、苦笑いするとともに、血は争えないものだと思った。

日名子はそんな栄の様子を眺めて、

〈ははーん、さてはサチを利用して思ったな？〉と感づいたが、日名子自身も食べなくなったので、サチの目線に合わせるようにしやがみ込み、わざと大きな声で、

「贅沢なお父さんでしょうがないわね。仕方がないから、帰りにお肉屋さんへ寄って、買い物してから帰ろうね」と言うと、サチは「うん！」と頷いて笑顔を弾かせた。

家族でわいわい騒ぎながらすき焼きなべを囲んでいる頃、栄たちがいなくなった公園に、夕日に手を合わせている白髪混じりの女性の姿があった。ちやうどそこを通りかかった友人のやつさんが、何気なくその女性の顔を見て驚いた。あまりにも栄に似ていたからだ。

〈もしかして、栄ちゃんの実の母親ではないか〉と思ったやつさんは、

「すみませんが、松下栄って知ってますか？」と声を掛けた。するとその女性は、何も言わず、慌ててその場を立ち去ってしまった。

栄の母親に間違いない、と感じたやつさんは、急いで栄に知らせたが、栄が公園に着い

たときには、女性の姿はどこにも見えなかった。

「どこへ行つてもたんやろう？ さつきあそこで、夕日に向つて手を合わせていたんやけどなあ――」

やっさんは、チューリップの花の方を指差して言った。

「何で俺を捨てたんだ！」と恨んだ時期もあったが、誠とサチが授かつてからはそんな思いはどこかに消え、むしろ可愛い我が子を手放さなければならなかったアユの悲しみの方がよく分かる栄であった。

アユが暮らしているという西の方角に目をやると、空は紅く染まり、まるで阿弥陀さまの後光を思わせるように、沈みかけた夕日が黄金色の光を放っていた。

「一体母ちゃんは、どんなことを祈っていたんやろう？」と思ひながら、栄もアユと同じようにその眩い光を拝むと、自然に子どもたちの幸せを願う気持ちが湧いてきたので、  
「きつと母ちゃんは、俺の幸せを祈ってくれていたに違いない」と感じた。

「恐らく母ちゃんは、俺の幸せを見届けにきたんやろうなあ。いつ頃からこの公園に来ていたんやろう。日名子や誠やサチのことを見てくれたやろか？」

そう思った栄は、大きな声を出して叫んだ。

「母ちゃん！ 俺も色々あったけど、今はこうして幸せに暮らしているぞー！ 母ちゃんも幸せになー！」

シンと静まり返った公園に栄の声が響き渡ると、やっさんの目から涙が零れた。